様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００４９０

研究課題名（和文）マルセル・プルーストと大衆化の力学：小説の生成過程と受容過程をめぐる表象史研究

研究課題名（英文）Marcel Proust and the Dynamism of Popular Culture: A Study of the History of Representations on the Genesis and Reception of the Novel

研究代表者
坂本　浩也（Sakamoto, Hiroya）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：５０５３３４３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀のフランスを代表する作家マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の執筆過程と、後世の受容過程の双方において、大衆文化が果たす役割を考察した。とりわけ、大衆文学における犯罪捜査の主題と、視覚文化におけるポスターの表象が作中にとりこまれる過程を解明した。また、作品の映像化の意義と問題点を検討し、現代の映画や小説におけるプルーストへの言及についても調査をおこない、その傾向を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
プルースト研究においては、小説と芸術（とりわけ絵画や音楽）との関係について多くの調査がなされてきたが、本研究では、プルーストが同時代の大衆文化にたいして抱いていた関心を調査し、『失われた時を求めて』における大衆小説的な主題（犯罪）や視覚文化（ポスター）の位置づけを明らかにした。また受容研究の対象を拡大し、現代の映画や小説、さらには心理学におけるプルーストへの言及を考察の対象とする可能性を開いた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the role of popular culture both in the writing process of Marcel Proust's novel "In Search of Lost Time" and in its reception by subsequent generations. In particular, the process of inscribing the literary theme of criminal investigation and the representation of posters in the novel were clarified. The problems of visual adaptation of his novel were also examined, and references to Proust in contemporary films and novels were also studied and their tendencies clarified.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　プルースト　失われた時を求めて　大衆文化　視覚文化　推理小説　大衆化　映像化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

⑴　小説家マルセル・プルースト（1871-1922）に関する近年の研究には 2 つの重要な傾向がある。第 1 の傾向は、草稿研究と歴史（表象史）研究の接続である。小説の生成過程をあつかう研究の関心が、草稿資料内部にとどまって時系列的な再構成をおこなうことから、同時代のさまざまな言説との関係を捉えなおすことへとシフトし、新鮮な発見をもたらしている。第 2 の傾向は、受容研究の発展である。プルーストの作品が同時代および後世の作家、批評家、思想家によって、どのように読まれ、どのような影響を与えてきたのかを具体的にあとづける著作や論文集の公刊が続いている。

⑵　ただし、上記いずれの傾向においても、プルーストは、広く認知された作家、批評家、思想家、芸術家との関係で論じられることが多い。たしかに小説『失われた時を求めて』は、卓越したハイカルチャー（文学、思想、芸術）をあつかうハイカルチャー（難解で革新的な文学）の記念碑と見なせる。しかし 20 世紀は、複製技術の発達と並行して、芸術、思想や科学技術の「大衆化」が進行した時代である。以上をふまえると、表象史の方法を用いて、大衆化の力学という観点から、作品の生成過程と受容過程を捉えなおす作業に取り組む必要があると思われた。

２．研究の目的

⑴　本研究の目的は、プルーストの作品の執筆過程と受容過程の双方において、大衆文化が果たした役割を総合的に検証することにある。まず、従来のようにハイカルチャーに属する作家、思想家、芸術家、批評家などに比較対象を限定するのではなく、広義の大衆文化に属する資料（新聞雑誌記事、視覚文化、犯罪小説など）を重点的に調査することによって、『失われた時を求めて』と同時代の隠された接点を明らかにする。

⑵　さらに、後世におけるプルーストのイメージそのものの大衆化のメカニズムを探る。そのために、大衆文化におけるプルーストへの言及、小説の映像化（映画化、マンガ化、翻訳における図版掲載）や二次創作についての調査と分析をおこなう。このように、大衆文化と関連づけながら、作品創造と作品受容を連続的にとらえることにより、プルーストを通して 20 世紀フランス文化史のひとつの流れを提示することを目指す。

３．研究の方法

⑴　「大衆文化」を、広義のメディア環境の変化によって相対的に広く共有されていた感性や活動と定義するならば、当然ながらプルーストは同時代の大衆文化にふれ、しばしば作品に取り込んでいる（新聞雑誌の購読、写真やポスターをはじめとする視覚技術の享受、観劇や観光、リゾートやスポーツなど）。また、大衆的なものは、小説の「主題」だけでなく、創作の「道具」にもなっている。たとえば写真複製や展覧会をぬきに作中の絵画への言及を論じることはできない。後世の受容過程に目を移せば、プルーストの作品は、ハイカルチャーの閉域を出て、映像化や二次創作による「大衆化」の対象となり続けている。『失われた時を求めて』という小説が、フランス文学およびフランス文化の歴史のなかに特別な地位を占めるにいたったプロセスにおいて、「大衆文化」はいかなる役割を果たしたのか？　この問いに答えるために、本研究は、A・コンパニョンが 1989 年の画期的なプルースト論（Proust entre deux siecles）で提唱した表象史の方法論を継承する一方で、大衆的なものの役割に着目し、ハイカルチャーの特権化という従来の傾向とは異なる視座を提供することを試みる。

⑵　本研究ではまず、小説だけでなく、書簡と草稿も対象にして、大衆文化への言及を調査し、全体像（プルーストの関心の分布）を把握することを試みる。そのうえで、とりわけ新聞報道や大衆小説において特権的な位置を占める「犯罪」の表象と、技術革新と並行した「視覚」の変容を中心に分析を進め、プルーストが大衆文化を用いつつ独自の作品世界を創造したプロセスを解明する。さらに、後世の文学と芸術の大衆化にともなうプルーストのイメージそのものの大衆化を検証する。

４．研究成果

⑴　大衆文学のテーマのひとつとして「科学技術」があげられる。まず坂本は、世紀転換期の文学的想像力における「テレビ電話」の位置づけについて再考した。同時代の雑誌記事などを分析したうえで、ジュール・ヴェルヌに代表される未来予想小説との比較をおこなった結果、プルーストが小説に科学技術的な比喩を組み込んだプロセスの一例を明確にすることができた。小黒はまず、19 世紀後半に隆盛を極めた通俗科学をめぐる諸言説に着目した。とくに 1880 年代から急拡大した科学教育について調査し、子どもが日常の事物をひとつひとつ「観察する」ことで世界を発見する営みが、日常的な美の発見をめぐるプルーストの美学的・自然科学的なプロセスと共振することを確認した。

⑵　科学技術の進歩と並び、プルーストの時代の大衆の関心を集めたのが、「犯罪」という主題であり、19 世紀後半から 20 世紀初頭は「探偵小説」の黎明期と見なされる。坂本は、『失われた時を求めて』と同時代の探偵小説の接点を確定するために、先行研究を批判的に検討したうえで、この大衆的な小説ジャンルの形成に関わった複数の作家（とりわけエドガー・アラン・ポー、コナン・ドイル、ロバート・ルイス・スティーヴンソンなど）について、プルーストがどのように受容し、どのような文脈で言及しているのか、書簡と小説・草稿を調査し、分析した。その結果、名探偵の推理よりもむしろ、巻き込まれ型の素人探偵の当惑や変装という冒険小説的な要素にプルーストが注目した可能性が明らかになった。とりわけ戦時下のパリを描く『見出された時』の重要な場面の下敷きとして、従来考えられていたような『千夜一夜物語』のオリジナルにもまして、スティーヴンソンの書いた現代版、『新アラビア夜話』の続編『爆弾魔』（妻ファニーとの共作）の場面構成が用いられたという新説を提示することができた。そもそも『失われた時を求めて』において、犯罪のメタファーが多用される一方で、警察や刑事が登場することは稀であるが、重要な例外として第 6 篇『消え去ったアルベルチーヌ』には、主人公が「未成年者誘拐」の疑いをかけられるエピソードがある。坂本は、刑法をめぐる議論を参照しつつ、この犯罪をとりあげた同時代の複数の作家（おもにアナトール・フランス、ジャン・ド・ティナン）との比較をおこない、プルーストの独自性を明らかにした（ハッピーエンドの不在、犠牲者の無名性、警察の二面性、父権と女性同性愛、罪悪感とユーモアの連関など）。

⑶　小黒は、プルーストの小説と同時代の視覚文化、とりわけ世紀転換期に黄金期を迎えた広告ポスターとの関係を再考察するために、美術史や文化社会史の領域における先行研究を検討して時代背景の整理把握をおこなった。そのうえで、ポスターの可能性に関心を寄せた当時の批評的言説（ロジェ・マルクス、ギュスターヴ・カーン、エミール・ストロースなど）とプルーストとの距離を確認し、小説作品に書き込まれたポスターに関する記述を読解した。そこから明らかになったのは、プルーストがそうした思潮とは一定の距離を取りながら、一枚のポスターに記憶想起のトリガーとしての示唆的な役割を与えている点である。第一次世界大戦という未曾有の災厄を生きた人々は、歴史を体現する石の建築があえなく破壊されることを知った。そのいっぽうで、場所に縛られることなく姿を現しながら、次々と張り替えられてゆく儚い存在としてのポスターにも記憶は宿る可能性がある。小黒は、プルーストがこのことを、年老いたシャルリュス男爵の姿を通して浮かび上がらせたとの解釈を提示した。2021 年 5 月に開催された国際シンポジウム「プルースト――文学と諸芸術」では、ポスターに注目した小黒の発表と、探偵小説を扱った坂本の発表にくわえて、「万国博覧会の見世物」についてクリストフ・プラドー（パリ＝ソルボンヌ大学）が論じ、「大衆文化」とプルーストの関係をめぐる研究に大きな可能性があることが示された（2022 年 4 月刊行の論集『プルーストと芸術』において小黒が翻訳を担当）。

⑷　プルーストの大衆化を検討するにあたっては、①小説の視覚化（訳書における図版の挿入、映画化、マンガ化）の意義と問題点、②映画や小説に登場する「プルーストの読者」像、③大衆文化における「プルースト効果」のイメージ、④二次創作と批評の境界という 4 つの観点から、坂本が事例を収集し、検討した。その結果、ステレオタイプ（同性愛の作家）や限定された場面（マドレーヌと紅茶による記憶のよみがえり）への参照の多さが確認されたが、その一方で、原文の細部を引用しながら創造的な書き換えをおこなう例（『ライフ・アクアティック』、『ヴァントゥイユの真実の生涯』）を分析することもできた。

⑸　プルーストの大衆化を研究対象にするだけでなく、じっさいに公開講座などの形式で、積極的にプルーストの大衆化そのものに寄与する活動、社会還元をおこなったことは、本研究課題のユニークな実績であり、ここに特筆しておきたい。

① 立教大学における連続公開セミナー「新訳でプルーストを読破する」全 14 回には、専門家以外の現代作家も講師に招き、毎回多くの参加者を集め、活発な交流がなされた。
② 個別の講演会・研究会としては、2019 年 5 月に、ソフィー・バッシュ氏（パリ＝ソルボンヌ大学）を迎えて、公開講演会「世紀転換期の文学と美術における樹木の言葉―プルーストとテオドール・ルソー」を開催し、美術作品が複製技術を介して受容されるなかでプルーストの小説とどのような関係を結んだのか考察した。同年 2 月には、泉美知子氏（中央大学）を迎え、「19 世紀ツーリズムの到来と文化遺産への眼差し―ラスキンのフランス旅行を中心に」と題する発表を出発点に、プルーストと教会建築の関係をめぐる社会的・政治的文脈について議論し、理解を深めた。
③ 2022 年 1 月に「プルースト現象」（嗅覚にもとづく自伝的記憶）の専門家・山本晃輔氏（大阪産業大学）を講師に迎えて開催したオンライン研究会「認知心理学におけるプルースト受容」は、受容研究の射程を科学の分野に広げる試みとして、新たな展望を開いた。

これらの公開研究会を通じて、大学の外部にプルースト受容を活性化する場を生み出し、研究者と一般読者との情報交換の場をつくりあげたことは、今後の研究にも有意義であると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 坂本 浩也	４．巻 39
２．論文標題 書評 ： 美食の文化史と作家研究の「マリアージュ」： 中野知律『プルーストとの饗宴』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 125～128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4355454	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本浩也	４．巻 27
２．論文標題 書評：Ayano Hiramitsu, Les Chambres de la creation dans l'oeuvre de Marcel Proust, Paris : Editions Honore Champion, 2019.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 cahier	６．最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小黒 昌文	４．巻 39
２．論文標題 書評 ： 和田章男『プルースト 受容と創造』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 119～124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4355453	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小黒 昌文	４．巻 38
２．論文標題 書評 ： 加藤靖恵『プルーストにおける花の世界の変遷』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 101～104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/2556303	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本浩也	4．巻 24
2．論文標題 書評：ジョゼフ・チャプスキ（著）『収容所のプルースト』岩津航訳、共和国、2018年	5．発行年 2019年
3．雑誌名 cahier	6．最初と最後の頁 33-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本浩也	4．巻 48
2．論文標題 マルセル・プルーストのジュール・ヴェルヌ的側面？　小説と科学の大衆化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立教大学フランス文学	6．最初と最後の頁 125-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂本浩也	4．巻 51
2．論文標題 プルースト受容の現在――大衆性と学術性のあいだで	5．発行年 2022年
3．雑誌名 立教大学フランス文学	6．最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hiroya Sakamoto	4．巻 52
2．論文標題 Le detournement de mineure selon Proust, France et Tinan	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Bulletin d'informations proustiennes	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Masafumi Oguro
２．発表標題 Proust a l'ere de la vulgarisation scientifique
３．学会等名 Colloque franco-japonais Proust et l’esthetique de la reception（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小黒昌文
２．発表標題 ある眼差しの歴史=物語のために――プルーストと二十世紀の視覚文化
３．学会等名 日仏シンポジウム「芸術照応の魅惑4 プルースト――文学と諸芸術」（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 坂本浩也
２．発表標題 探偵と犯人のあいだで――プルーストと推理小説の時代
３．学会等名 日仏シンポジウム「芸術照応の魅惑4 プルースト――文学と諸芸術」（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 坂本浩也
２．発表標題 プルースト受容の現在――大衆化と学術性のあいだで
３．学会等名 日本プルースト研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 吉川一義(編)、三浦篤、アントワーヌ・コンパニョン、中野知律、和田章男、セシル・ルブラン、和田恵里、マチュウー・ヴェルネ、青柳いづみこ、松浦寿輝、水村美苗、湯沢英彦、荒原邦博、泉美知子、ソフィー・デュヴァル、津森圭一、小黒昌文、クリストフ・プラドー、坂本浩也、ナタリー・モーリヤック・ダイヤー	4．発行年 2022年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 381
3．書名 プルーストと芸術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

それぞれの『失われた時を求めて』 立教大学公開セミナー「新訳でプルーストを読破する」
https://tanemaki.iwanami.co.jp/categories/672

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小黒　昌文 (Oguro Masafumi) (50438199)	駒澤大学・総合教育研究部・教授 (32617)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関